

幼児歌曲からみる音楽指導の一考察

仲野悦子

A Study of Music Instruction for Infants

Etsuko Nakano

Summary

When considering the role of music and its teaching methods, it is important to have self-realization of one's own music interest and knowledge. There are three points to consider in this process; 1) how great a student's interest in music and how strong their desire to become a preschool teacher, 2) at what age and in what way was the student's interest in music aroused; and, 3) what kind of subject matter is important for infant songs and how is the language used. This study examines the relevance of these three issues.

The results of this study demonstrated that students with strong interests in music have the strongest desire to become a preschool teacher. This interest was primarily influenced by the student's mother and/or an early childhood educator, and it appeared that the age of greatest influence on music interest occurred in infants less than 12 months old. This influence was impressed onto the infant through the mother's or educator's singing and choice of words. In addition, songs that used animals for their subject matter held the infant's interest the longest

Received Oct. 31, 2003

Key words: music instruction, infant song, language

1 はじめに

我々の日常生活の中にはさまざまな音があふれ、おのずと好む好まざるを問わず耳に入ってくる。同じように子ども達もさまざまな音に囲まれて生活している。しかし、私たちは流れている音をどのように捉えるかによって、また、どのように関わるかによって意味を持つようになり、大切なメッセージであるにもかかわらず気がつかないでそのまま通り過ぎていってしまうことは多くある。

保育者養成校として、学生が音楽を保育内容「表現」としてどのように捉えたらよいのか、保育にどのように音楽を取り入れ生かしていったらよいのかなど、保育における音楽の意味・役割を学生に考えさせ指導していくことは当然のことである。そして、音楽を生きたものにするために音楽的な知識や技術はもとより、対象としている子どもの理解を踏まえた上での内容の検討や指導であるべきことは間違いのないことである。

本論においては、第1の視点として、将来保育者を目指して入学してきた幼児教育学科の学生の音楽的興味や今までの音楽経験を知ることによって、音楽に対する理解や意識を知る。第2の視点として、子どもの理解として年齢別における子どもの音楽的活動と保育者の援助を考える。第3の視点として、幼児歌曲の歌詞に見られよく取り上げられている題材を取り上げ、言葉との接点を模索する。これら3つの視点を通して、保育における音楽の役割や指導方法を明らかにしたい。

2 保育者を目指す学生の音楽意識および音楽経験

将来保育者を目指し、岐阜聖徳学園大学短期大学部幼児教育学科に入学してきた学生に、自分の長所や短所を上げて性格をアピールさせた結果、第一にとっても明るく思っている人が多い。次に元気である、最後まであきらめたりしないという粘り強さも備えている。そしてとてもやさしいとした保育者として肯定的とも受け取れる意識を持っている。反面、短気であり優柔不断のところもあり、喜怒哀楽が激しいとしたネガティブな自己診断を下している学生もいる。

このような学生に対して、保育内容「表現」領域としての音楽をどのように受け止め子ども達と楽しむことができるかを探るために、音楽意識および音楽経験をアンケート方式で探った。

日時 平成15年4月24日、4月25日

対象 幼児教育学科 1部生1年生123名・3部生1年生52名

- 内容
- ①音楽的興味度と音楽鑑賞の頻度
 - ②今まで体験した楽器や音楽経験の感想
 - ③授業「基礎音楽」の教材として幼児歌曲「こどもの歌ベストテン」に挙げられている中で知っている歌や好んで歌う歌曲
 - ④幼い頃母親に歌ってもらった歌曲

以上4項目を中心にアンケート調査を試みた。

① 学生の音楽的興味度と音楽鑑賞の頻度

音楽的興味		音楽鑑賞	
・興味がある	156人 (89%)	・よく聞く	111人 (64%)
・興味がない	2人 (1%)	・時々聞く	62人 (35%)
・どちらともいえない	13人 (8%)	・聞かない	2人 (1%)
・無回答	4人 (2%)		

殆どの学生が音楽には興味を持っている。そして半数以上の学生は様々な音楽を楽しんで

いる中で、主に J-POP や HIP-POP の音楽をよく聞いている。中には邦楽を楽しんでいる学生もあり、鑑賞曲としていろいろなジャンルの音楽を楽しんでいることが理解できる。

② 今まで体験した楽器や音楽経験（表1「体験した楽器」参照）

今まで演奏した楽器としてピアノ（113名 65%）が一番多い。家庭において3歳頃から今まで10年以上続けている学生がいる。ピアノばかりでなく、電子オルガン（エレクトーン）を長く練習して親しんでいる学生もいる。リコーダー・ギター・和太鼓などは授業やクラブ活動で経験したようである。また、中学や高校で吹奏楽の部活に入り金管楽器や木管楽器を演奏したり、授業で合唱に取り組み、クラス全員で課題曲を歌いこみ発表した時の充実感やピアノなど難しい曲に挑戦し弾き上げた時のうれしさが、余韻として残っているようである。

しかし、楽しい事ばかりでなく、楽器などの練習は思うように上達できず、どちらかというところイヤやっていたと言う学生が多い。技術的なテクニックの訓練を乗り越えた時、初めて音楽の楽しさや充実感を味わったとした感想を述べている。

③ 授業「基礎音楽」の教材として幼児歌曲「こどもの歌ベストテン」から知っている歌や好んで歌う歌（表1「一番好きな幼児歌曲」参照）

よく音楽を楽しんでいる学生に対して、将来保育者として子ども達と一緒に歌うだろうと思われる幼児歌曲（教材「こどもの歌ベストテン」）85曲中どのくらい知っているかをたずねた。

26～30曲	5人（3%）	46～50曲	51人（29%）
31～35曲	7人（4%）	51～55曲	36人（21%）
36～40曲	19人（11%）	56～60曲	14人（8%）
41～45曲	19人（11%）	61～65曲	13人（7%）
66～70曲	5人（3%）	71～75曲	1人

半数以上の学生は、幼稚園・保育園時代に多くの幼児歌曲を歌い親しんで来たようである。なつかしように好きな歌のエピソードを書いている学生もいた。日頃保育の現場において歌い親しまれている歌（毎日のうた、春・夏・秋・冬のうた、行事のうた、好きなうた、アニメソングなど、それぞれ保育者から選曲されたベストテンの曲とディズニーの5曲）の中で半数以上知っている学生が8割以上いた。その中で好きな歌として上位20曲を取り上げて見た。（表1参照）

「おもいでアルバム」、「となりのトトロ」、「手のひらを太陽に」、「アンパンマンマーチ」、「おおきな栗の木の下で」となっている。「おもいでアルバム」を上げた学生は、『卒業や卒園の時期になると何故か弾きたくなる。いろいろ思い出が浮かんでくる』と理由を述べている。「となりのトトロ」を上げた学生は、『アニメをよく見ていた。自然をテーマにしたところが好きで、この曲を聴くと子どもの気持ちに戻れて元気がもらえるような気がする』などと感想を述べている。楽しい・元気がでる・ほのぼのとするなどの感想が多く、子どもたちと友達同士よく歌った思い出や行事の時、歌に動きをつけて発表したときのことなどを歌とともに思い出

している。また、「あめふりくまのこ」を上げた学生は『保育園の時、先生が歌詞に出てくる風景を黒板に書き歌ってくれたことを今でも覚えており好きな曲になった』としている。

このように子どもの頃親しんだ思い出は、今なお心の中に留められている。このことは、保育者としての役割・影響が子どもにとってとても大きく重要であることが理解できる。成長しても小さい頃の楽しかった記憶が鮮明に残っており、彼らの好む歌を見ても影響が大きいことが言える。

④ 幼い頃母親に歌ってもらった歌曲（表1「母親に歌ってもらった幼児歌曲」参照）

幼いころ母親に歌ってもらった思い出を持つ学生は129人（74%）であり、多くの学生は歌をとおして母親との関わりを持っていた。歌ってもらった歌曲として、「チューリップ」、「どんぐりころころ」、「犬のおまわりさん」、「おかあさん」、「シャボン玉」が上げられている。学生が取り上げた一番好きな歌との関係では、20曲中7曲が同じ歌曲として取り上げられている（「どんぐりころころ」・「おかあさん」・「キラキラ星」・「おおきな栗の木の下で」・「森の熊さん」・「となりのトトロ」・「一年生になったら」）。学生の中には、『母がピアノで弾いて歌ってくれ印象に残っている』と書いている。保育者と同じく母親との関わりの中でも、音楽をとおして楽しみコミュニケーションしてきたことが理解できる。

このような音楽経験だけから見ても、幼い頃の保育者や母親との関わりは、将来保育者を目指している学生にとって大切な経験である。このような経験が自ずと保育における考え方や音楽教材の取り上げ方にも影響があると思われる。

表1 「保育者を目指す学生の今までの音楽的経験」

	体験した楽器	一番好きな幼児歌曲	母親に歌ってもらった幼児歌曲
1	ピアノ	おもいでアルバム	チューリップ
2	リコーダー	となりのトトロ	どんぐりころころ
3	電子オルガン (エレクトーン)	手のひらを太陽に	犬のおまわりさん
4	ギター	アンパンマンマーチ	おかあさん
5	木琴	おおきな栗の木の下で	シャボン玉
6	フルート	小さな世界	キラキラ星
7	クラリネット	ありがとうさよなら	ちょうちょ
8	ドラム	あわてんぼうのサンタクロース	こいのぼり
9	サクソ	山の音楽家	とんぼのめがね
10	ハーモニカ	おかあさん	おおきな栗の木の下で
11	ピアノカ	一年生になったら	森の熊さん
12	和太鼓	森の熊さん	たなばた
13	小太鼓	ミッキーマウスマーチ	うれしいひなまつり
14	トランペット	おおきな古時計	小鳥のうた
15	トロンボーン	とんでったバナナ	アイアイ
16	三味線	キラキラ星	子守唄
17	ハンドベル	どんぐりころころ	となりのトトロ
18	アコーディオン	おげななんてないさ	めだかの学校
19	琴	南の島のハメハメ八大王	一年生になったら
20	パーカッション	おべんとう	お正月

3 年齢別における音楽活動のあり方

「子どもは豊かに伸びていく可能性をそのうちに秘めている。その子どもが、現在最もよく生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培う」ことが保育の目標であり、保育者は「豊かな感性と愛情のもとに専門的な知識と技術を持って、一人一人の子どもにかかわる」ことが求められている。^(注1) 保育者は子ども達の発達を常に考慮しながら計画を立案し保育をすることは当然のことである。年齢が低ければ低いほど身体的・言語的な成長発達は目で確認できるくらい変化している。また、一人ひとりの成長発達も同じように伸びるわけではなく個人差が大きい。毎日の保育における保育者の働きかけや関わり、そして豊かな環境構成は子ども達の活動を大きく広げ影響を及ぼしていることは周知のとおりである。

ここに音楽活動を中心とした年齢別における発達の特徴を「発達の主な特徴」、「子どもの音楽活動」、「保育者の援助」に分け表にまとめた。(表2参照)

表2 「年齢別における音楽的活動」

年齢区分	発達の主な特徴	子どもの音楽活動	保育者の援助
6か月未満児	笑う・泣くという表情や体の動きで自分の要求を表現する 3か月頃周りの物音や大人の話のしている声の方を見る 足を蹴る・自由に首の向きを変え動くものを目で追う ガラガラなど少し握ったり振ったりする 4か月を過ぎると手足の動きも活発になり音のする方向に向き、見つめたり追視する	胎内における振動や音に対して反応(血流音や外界の音など)する 新生児の無意識な手・足・首の動きが見られ、外界の音の反射的な動きがある 最初の音声表現は産声に始まる (声の大きさは大体1点aくらい) 快音・不快音の聞き分けをする 身近な音楽に手足を動かして反応することがある	子どもに優しく語りかけたり楽しく歌いかけたりする 言葉をかけながら音色のきれいな楽器や玩具などを鳴らすことにより、聞いたり・見たり・触ったりできる 玩具を身近に用意し、一緒に遊びを楽しみ、関わりをもつ CDなどを利用していろいろな楽しい音楽を聞き、一緒に親しむ
6か月未満児から1歳3か月未満児	身近な人の顔が分かり、あやしてもらおうと非常に喜び、積極的に関わりを持つようになる 7か月頃から座った姿勢で両手が自由に使える 9か月頃には両手で物を持って打ち付けたり、たたき合わせたりすることができる 簡単な言葉が理解でき、自分の意志や欲求を身振りなどで伝える	保育者の歌を楽しんで聞く 歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しむ 気に入った音楽に耳を傾ける 音の出る玩具を見つけ、自分で音を鳴らして楽しむ 保育者や他の子どもがしている音遊びを、同じように真似て遊ぶ テレビなどから流れる音	保育者は日頃の生活のなかで優しい歌声を豊富に聞かせる CDやカセットテープなどを利用して、快い音楽を聞く機会を豊富にする 気に入った歌や音楽を繰り返し返すようにし、子どもに満足感を与える 保育者が子どもと一緒にできる音遊びを工夫し、楽しむことにより大人の動作を模倣する喜びを味

	1歳頃には伝い歩きもでき、外への関心も高まり身近な言葉を話す	楽に合わせて手足や体を動かす	わかるようにする
1歳3か月から2歳未満児	歩き始めたり手を使ったり、言葉を話すようになる 自発性・探索意欲が高まるが、まだ大人の世話を必要とする自立への過程の時期である 二語分を話し出す 歩行の確立により、自分の意図が行動として方向化する	保育者と一緒に楽しく歌う 保育者と一緒に簡単な手遊びをして楽しむ 音楽に合わせてリズムカルに体を動かしたりして遊ぶ 音の出る玩具などに興味を示し、いじったりして遊ぶ 好きな音楽を繰り返し聞いたりして楽しむ 興味のある歌の一節を不安定ながら歌ったりする	保育者は日頃の生活のなかで優しい歌声を豊富に聞かせたり、一緒に歌って楽しむ。また、手遊び歌を利用して指や手足をリズムカルに動かすようにする 手に持ちやすい、安全な、音色の美しい玩具・楽器を身近な所に置く CDやカセットテープなどを利用して快い音楽を聞く機会を豊富にしたり、興味ある音楽を繰り返し聞かせるなど、子どもの状況を的確に把握し対応する
2歳児	走る・跳ぶなどの基本的運動機能が伸び、自分の思うようにリズムカルな運動や音楽に合わせて体を動かすことを好む 指先の動き・発声・構音機能の発達により子どもの関心・探索意欲が高まり、人との関わりが生まれる 簡単なごっこ遊びができる 自分のしたいこと・して欲しいことが言葉で表出できる	保育者と一緒に全身や手指を使い、歌いながら手遊びを楽しむ 音楽に合わせて走ったり・身体を振ったりしてリズムを楽しんだり保育者と一緒に表現して楽しむ 何度も聞く歌を自然に口ずさんで歌うことがある 音楽に合わせて楽器を鳴らし、音やリズムを楽しむ 気に入った音楽を何度も繰り返して聞いたり歌ったりすることを好む	模倣やごっこ遊びの中で、保育者は一人ひとりの気持ちを受け止めて仲立ちや援助することにより遊びや音楽活動を発展させる 日常の保育のなかで子どものつぶやきやしぐさを的確にとらえ、一緒に共感しながら表現する 大きな声・無理な発声には注意し、正しく・美しく聞こえるように促す 子どもの好きな、優しい歌を何度も繰り返しながら一緒に歌う 動きやリズムは不自然で未熟であるが、ある程度の自由さを認める 手に持ちやすく安全な音色の美しい楽器などを身近に置き、楽しめるようにしておく
3歳児	一人独立した存在として行動する 他の子どもとの関係が深くなり、ごっこ遊びも発	自分の意志で歌ったり・身体で表現したりして楽しむ 歌のメロディーを覚え、	心身ともにめざましい発育・発達を示すが自分をうまく表現できないこともあるため、一人ひとり

幼児歌曲からみる音楽指導の一考察

	<p>展し時間的にも長く活動が持続できる 知識欲も強くなり、言葉はますます豊かになる 自分のしようとする事に意図と期待を持って行動する 歩行の確立により、自分の意図が行動として方向化する</p>	<p>ゆっくりであるが歌詞もはっきりと歌える 簡単なメロディーを即興的に口ずさむことがある 一人で喜んで歌う 擬声などの言葉遊びを楽しむ 音の出る楽器などに興味を示していじったりして遊ぶ 歩いたり・走ったり・簡単な動きのまねや自由表現ができるようになる</p>	<p>の発達に目を向けていない対応が必要である さまざまな音の素材・楽器などを身近に置き、音を楽しんだり、メロディーに合わせてリズムを打ったり、いろいろな動きを真似て表現する活動を発展させる 音楽活動の萌芽の時期であることから、一人ひとりの子どもの興味や自発性を大切に、表現しようとする意欲をより引き出すための絵本や手遊び歌など、興味を持ったことを一緒に共有しながら遊ぶようにする</p>
<p>4 歳児</p>	<p>体の動きが巧みになる一方、各機能間の分化・統合が進み、異なる2種以上の行動を同時にとるようになる 自分以外の人や物をじっくり見る反面、見られる自分に気づき、自意識が芽生える 目的を立てて行動するようになる反面、結果などが気になるなど心の葛藤を体験する 人だけではなく、周りの物にも鋭い関心を向ける 自然物や遊具などの特性を知り、関わり方・遊び方を豊かに体得する 仲間とのつながりが出てくる</p>	<p>身体表現においては全身のバランスもよくなりリズムカルに歩いたり、スキップやダンスもできる 歌う意欲が盛んになり、みんなでそろって歌うことを好む 動きを伴って音楽を聞くことができるようになったり、リズムカルに楽器を演奏できるようになる 簡単な歌を遊びながら作ったりする 音楽的能力も発達し、正しいリズムや音程も理解できる 強弱の比較、テンポの変化にも対応ができる手・指の運動はより巧みになり手遊び歌なども仲間と一緒に楽しむ メロディーやリズムに気をつけて楽器を鳴らしたり、合奏を楽しむ</p>	<p>友だちとの関係や集団生活の展開に留意する CDやカセットを利用しながらいろいろな音楽を鑑賞したり、音楽に合わせて一緒に動きを付けてみる 保育者自身が音楽を楽しむ、生活態度もリズムカルであり、音に対して敏感であることが大切である 生活のなかに歌・手遊び・楽器など素材を豊富にしておくとともに、仲間と一緒に活動できるように配慮する 表現する意欲や創造性を豊かに育てるために、視聴覚教材や絵本などをたくさん見たり聞いたりしてイメージを広げる経験を多く取り入れる</p>
<p>5 歳児</p>	<p>運動機能はますます伸び運動を喜んで行う より一層仲間の存在が重要となる 一つの目的に向かって数人がまとまって活動する</p>	<p>音楽的要素（音の高低・強弱・速度・拍子など）が体で感じ取ることができ、歌う・楽器を弾く・体で表現するときうまく取り入れることができる</p>	<p>子ども達の表現しようとする気持ちを大切に、個々の表現を認める みんなで一緒に表現するために、相手の表現を容認しあい、協力しあって</p>

	<p>集団としての機能が発揮され、仲間の中の一人としての自覚や自信が持てる 自分の思いや考えをうまく表現したり、他人の言うことを聞く力を身につけ、社会生活に必要な基本的な能力が見られる</p>	<p>身体的運動も無駄がなく、音楽に合わせて表現することができ、自分の思いや考えを表すことがうまくなる 自由表現するときは表現の仕方を工夫したりする仲間と一緒に活動するときはなるべく揃えるように気をつけ、自分のパートを間違わないように気を配り、表現することの楽しさを理解し始める テレビのアニメソングなどよく覚え楽しく歌える</p>	<p>創り出す喜びを感じさせる 生活のなかでさまざまな音に注意を向けさせる 友達などの表現を見たり、よい音楽を鑑賞させたりしてやりたくなるように環境を整える リズム楽器など合奏することの楽しさを感じさせるために、楽器の弾き方指導や興味の持てる曲の紹介などに配慮する</p>
<p>6 歳児</p>	<p>手や指の動きは一層発達し、他の部分と協応もできる 集団遊びとして組織だった共同遊びが多く、長く続く 何でも知ろうとする知識欲が豊富である</p>	<p>歌うこと・合奏すること・体で表現することも自分の思いのまま発揮でき、楽しむ 合奏するときにも自分のパートに責任が持てる 好きな曲を一人で歌ったり、友達同士一緒に歌うことがある 動きがとてもしずみカルになり、いろいろなリズムを体で表現しながら歌うこともできる</p>	<p>表現しようとする意欲を持たせるための音楽環境を整え、保育者自らも楽しむ 友達との関わりがスムーズに流れるように、一人ひとり状況を確認し認める リズム楽器などある程度数を保育室に置いておき、自由に使えるようにしておく CDやカセットテープなど使い方を理解させ、自由に利用できるようにしておく</p>

保育内容における音楽活動は、最初「子どもに優しく語りかけをしたり、歌いかけたり、泣き声や喃語に答えながら、保育者とのかかわりを楽しいものにする」受動的な活動から始まり、しだいに「保育者の歌を楽しんで聞いたり、歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しむ」活動になり、一緒に歌ったり簡単な手遊びをしたり、また体を動かしリズム遊びをしたりして楽しく遊ぶことができるようになる。

「笑う・泣くという表情や体の動きで自分の要求を表現する」、「4か月も過ぎると手足の動きも活発となり、音のする方向に向き、見つめ、追視する、喃語を発する」このような6か月未満児に対して、保育者は「優しく語りかけたり、楽しく歌いかけたり、泣き声や喃語に答えながらかかわりを楽しいものにする」としている。1歳3か月から2歳児になり、言葉を使うことが楽しめるようになり2語文を話し出す。また、興味のある歌の一節を不安定ながら歌っ

たりしながら模倣活動もできるようになる。保育者は、子どもの好きな歌を何度も繰り返しながら一緒に歌ったり、音楽に合わせてリズム遊びをすることを楽しむ。このように子どもと一緒に日常の生活や遊びのなかで音楽をとおして表現するように働きかけることが大切である。また、「子どものつぶやきやしぐさに共感し、表現の喜びや芽生えを育てる」ことに配慮をし「子どもの好む歌、簡単な歌詞、旋律の歌や曲を正しく、美しく表現する」ことが大切としている。

3歳児から6歳児においては、感性と表現に関する領域「表現」のなかに音楽活動の項目がある。ねらいとしては、「身近な社会や自然事象への関心を深め、不思議さ・美しさ・尊さなどに対する感性を豊かにする」ことである。そして、保育者の基本的な子どもへの配慮としては、「個々の子どもの気持ちや考えを理解して受容し、保育者との信頼関係の中で気持ちを表すことができるなど情緒の安定した生活ができるようにする」ことであるとし、自分から表現しようとする気持ちを大切に、表現する意欲や創造性を育てることが基本的な保育者の姿勢としている。

保育内容として、3歳児は子ども自身が、歌ったり・聞いたり・身体表現したり・楽器を鳴らしたりしながら音楽に親しむとし、4・5歳児は、保育者の音楽的な活動を通して、感じたことや思ったこと、想像したことを様々な方法で表現することをねらいとし、次のような内容になっている。

- ・様々なものの音、色、形、手触り、動きなどに気づき、驚いたり感動したりする。
- ・音楽に親しみ、みんなと一緒に聴いたり、歌ったり、踊ったり、楽器を弾いたりして、音色の美しさやリズムの楽しさ味わう。

6歳児においては、運動機能も発達し、仲間の存在感が高まり集団遊びとしての機能も発揮できるようになる。このために音楽活動も豊かになり、積極的な活動に広がり求め、感じたことや思ったこと、想像したことを創意工夫して、様々な方法で自由に表現できる。

- ・感動したこと、発見したことなどを創造的に表現する
- ・自分や友達の表現したものを互いに聞かせ合ったり、見せ合ったりして楽しむ

このように、年齢が上がるにつれ個々の活動から「みんなといっしょにする」活動となっていく。このことは自分の表現のみを主張したり自分だけの表現のみにとどまらず、友達の表現を受け入れたり認識できるようになったことを表している。そこには新たな表現が生まれ、自ずと音楽活動や表現活動が膨れ上がり、大きな広がりが出てくることになる。

これらの「内容」を達成するために、保育士は次のことを配慮する必要があるとしている。

- ・玩具などの大きさ・形・色・音質など適切な物を選ぶ。
- ・優しい歌声や快い音楽を聞く機会を豊富にし、好きな歌や音楽は繰り返すようにし、満足感を味わえるようにする。
- ・手や指を使う遊びでは、子どもの自発的な活動を大切にしつつ、時には保育士がやって見せて一緒に楽しむ。

- ・一緒に絵本などを見ながら、絵本の内容を動作や言葉で表したり、歌を歌ったりして模倣活動を楽しむ。
- ・生活や遊びの中で、子どものつぶやきやしぐさなどに保育士が共感し、表現の喜びや芽生えを育てる。
- ・子どもの好む歌、簡単な歌詞、旋律の歌や曲を正しく・美しく表現する。
- ・一人一人の子どもの興味や自発性を大切に、自分から表現しようとする気持ちを育てる。
- ・表現をしようとする気持ちを大切に、生活と遊離した特定の技能の習得に偏らないようにする。
- ・表現しようとする意欲を高め、結果にとらわれず、一人一人の子どもの創意工夫を認め、創造的な喜びが味わえるようにする。
- ・子どもの考えや子ども同士の認め合いを大切に、みんなで一緒に表現することの喜びを味わうようにする。
- ・イメージが湧き出るような雰囲気づくり、様々な材料や用具を適切に使えるようにしながら表現する喜びを味わい、創造性を豊かにする。
- ・子ども同士と一緒に活動する場合、お互いに相手の立場を認め合いながら、協力し合って表現することに喜びを感じるようにする

このように保育所保育指針における発達段階に沿った保育士の関わりや援助は、子ども達の表現活動に対して大きな影響を及ぼし、適切な配慮がより一層求められている。しかし、何よりも大切なことは保育者自身が音楽を楽しんでいるか、子どもと一緒に音楽を楽しめるのか、また、様々な出来事に対して子どもの目線に立って共に喜んだり悲しんだりして子どもと共感しあえるのかなど、保育者自身の感性が問われていると思われる。

4 幼児歌曲に見られる歌詞と言葉との関連性

幼い子どものための歌やおはなしというのは、文化の差異を問わず、地球上にあまねく存在し、繰り返し歌ったり聞かせたりして育児するのが普通である。童謡も童話も子どもからの欲求に裏づけられた産物であり、赤ちゃんにとって、うたい、話しかけてやることは無条件に心地よいことであり、快であるばかりか、それがことばへのレッスンの出発点となる。^(注2)とされているように、われわれ人間にとって人とのつながりや関わりを求める時、様々な表現手段を持っている。言葉・音楽・絵画・身振りなどを媒体にして自分の思いを伝えているばかりではなく、コミュニケーションとしての意味も含まれてくる。

「生を授かったばかりの段階で、赤ちゃんが外界とコミュニケーションをはかろうとする際、周囲から入力される情報は、最初、メロディーとしてやってくるのである。そして、音楽はわれわれにとって暇つぶしの娯楽でも手なぐさみでもない。また単に、他者との情報交換を促すためにあるのでもない。ヒトに特有とされる言語能力を発達させる源なのである。

ひいては音楽を知覚することで、言語にもとづく高次な論理的思考も可能となる」^(注3)

とも言われている。このことから、音楽の果たす役割は単に楽しく気持ちよいというだけではなく、人として生きる力を創り出す源として言語との関連においてとても重要であることが理解できる。そして、日常乳児から幼児まで関わっている保育者は、音楽をとおして行う様々な活動が子どもの成長発達にとって重要な役割を担っていることを改めて認識し、より多くの歌いかけや言葉かけが求められている。

ここで、保育者がよく利用している5冊の幼児歌曲集に取り上げている歌曲、491曲に対し、歌詞に含まれている「動物」・「食べ物」・「自然」・「植物」・「園行事」・「乗り物」などの題材を取り上げ、言葉との関わりから検討を試みた。この表に上げられている題材は、2回以上出てきたものをそれぞれ分類し表にしたものである。(表3参照)

幼児歌曲の歌詞に含まれている表現題材で一番多く見られるのが「動物」である。94種類の動物(哺乳類28、鳥類22、昆虫類21、魚類9、その他14)が上げられる。小鳥が22回、いぬ・くまが16回、ねこが14回、ぞうが12回、たぬきが11回、ぶたが10回、ねずみ・さるが8回、かえる・うさぎ・ひつじ・りす・ちょうちょ・すずめ・魚が7回、やぎ・うし・とんぼが6回と続き、2回以上見られる動物が56種類あり、子どもにとって一番親しまれ好まれる題材なのであろう。

次に上げられる題材として「食べ物」である。種類としては「動物」より多く98種類の食べ物が出てくるが回数としては少ない。おにぎり・にんじんが6回、バナナ・卵・牛乳が5回、木の実・栗・せんべい・みかん・お菓子・りんごが4回となっている。2回以上見られるのが37種類の食べ物である。

3番目に現れる題材として「自然」である。78種類の自然を表現する言葉が出てくる。そのなかで、空が32回で一番多く題材として歌詞に現れる。次に山が26回、星が22回であり小鳥と同じく好まれる題材である。風が21回、お日様が18回、雪が16回、海・雨が12回、水が11回、野原・雲・月が10回と続き一つひとつの題材としての現れる回数は多い。2回以上見られるのが33種類である。「食べ物」より僅かに少ないものの、多くの自然が子ども達の活動に関係していることが理解できる。題材「動物」や次にあげられる「植物」と関連して自然との関わりは子ども達の活動を広げ、季節感・虫や植物の生態など様々なことを教えてくれる。実際、子ども達の手や肌で感じる事ができる多くの直接体験は、表現する上においても大切なことである。

次は「植物」である。個々の名称ではなく花・草・実・木・葉・種といった総称の題材が多い。58種類の題材のなかで花が26回、草が9回、バラ・タンポポ・もみじ・桃・チューリップ・木・桜・種が4回、芽・葉が3回現れる。2回以上見られるのが19種類である。

「園行事」としては20種類見られる。遠足・クリスマスが7回、卒園が6回、誕生日会が5回、虫歯予防デーが4回と続く。2回以上現れる題材は11種類である。行事において歌われることは多くあるものの、直接題材として歌詞に現れることは少ない。一般行事とともに関係する題材

表3

「幼児歌曲に現れる表現題材」

分類	動物	食べ物	自然	植物	園行事	乗り物
種類	94	98	78	58	20	16
題	小鳥 いぬ くま ねこ ぞう たぬき ぶた ねずみ さる かえる うさぎ うつじ りす ちよ ちよ すずめ 魚 やぎ うし とんぼ ライオン モグラ ひよこ ひばり せみ しか うま きんぎょ みみず あひる からす ワニ へび カバ めだか 虫 みつばち かもめ つる ろば キリン ゴリラ きつね さい どじょう てんとうむし こおろぎ バッタ ほたる かまきり あめんぼ にわとり ツバメ 七面鳥 かめ かたつむり おたまじゃくし	おにぎり にんじん バナナ 卵 牛乳 木の实 栗 せんべい みかん お菓子 りんご イチゴ レンコン トマト アンパン キャンディー アイスクリーム ジャガイモ 焼き芋 べんとう ドロップ サンドイッチ ラムネ びわ まめ 柿 しょうが ごま ふき ビスケット ケーキ お餅 ご飯 キャベツ オムレツ スイカ 竹の子	空 山 星 風 お日様 雪 海 雨 水 野原 雲 月 池 森 波 夕焼け 夕月 夜 雷 小川 土 畑 北風 島 貝殻 虹 粉雪 林 丘 氷 原 つば そよ風 野 太陽	花 草 バラ タンポポ もみじ 桃 チューリップ 木 桜 芽 葉 朝顔 コスモス つくし んぼ れんげ ひょうたん アネモネ つばみ	遠足 クリスマス 卒園 誕生日会 虫歯予防デー 敬老の日 お月見 たこあげ 芋掘り ひなまつり 七夕	バス 汽車 船
材						

幼児歌曲からみる音楽指導の一考察

として、クリスマス・お月見・海の日・父の日・七夕に関する歌があった。

「乗り物」としての題材は以外に少ない。16種類の乗り物が取り上げられている。回数も少なくバスが4回、汽車・船が2回となっている。男の子にとって乗り物は興味深い対象であると思われるが、幼児歌曲に見られる題材としては少ない。

1956年代の幼児の音楽リズムに見られる「好まれる表現題材」と比較して見ると違いが明らかである。(表4参照)

表4 「好まれる表現の題材」

1 乗り物	2 遊び	3 動物	4 人物 行事 作 業 そ の 他	5 夢物語	6 植 物	7 自然現象
汽車 自動車 電車 自転車 三輪車 飛行機 ヘリコプター スクーター エレベーター ゆりかご ふね ボート ウォーター シュート うば車 馬車 トロッコ 荷車	おにごっこ かくれんぼ すもうごっこ ままごと でんわごっこ シーソーのり ぶらんこのり 回旋塔の遊び すべり台遊び 木馬遊び まりつき はねつき たこあげ 石けり なわとび こままわし 野球ごっこ 水鉄砲	ぞう うし 馬 犬 猫 うさぎ こい あり たぬき おたまじゃくし へび あひる すずめ つばめ からす とんぼ ちょうちょう はち にわとり ひよこ りす ねずみ くま ライオン きりん さる かめ かに たこ どじょう きんぎょ	おてつだい お母さん おばあさん お父さん 赤ちゃん たなばたさま クリスマス まめまき 運動会 おまつり チンドン屋さん お嫁さん だるまさん たき火 もちつき	おひめさま おうじさま 魔法使い おばけ ももたろう サンタクロース おに 金太郎 一寸ぼうし	たんぼぼ チューリップ すいれん きく おちば もみじ どんぐり 木の葉	雨ふり 雪ふり 入道雲 星 月 太陽 ゆうやけ 風 波 川の流れ

(番号は好まれる種類の順を示す)

(『幼児の音楽リズム』第7集 p136)

ここで好まれている題材の順として「乗り物」や「遊び」が上げられている。^(注4)「遊び」においても今回取り上げた歌曲の歌詞のなかには殆ど見ることができず、手をたたく・音あてをする・足踏みをする・まねっこする・踊る活動しか出てきていない。好まれる題材のなかでも「動物」が多く取り上げられていることは同じである。このように時代によって変化していることが、題材によっても理解ができる。

「歌い継いでいきたい子どもの歌」^(注5)のなかには100年前から歌い継がれている〈ちょうちょ〉・〈まめまき〉・〈水あそび〉や、50年以上歌い継がれている歌も多く、今なお保育の中でよく歌われ子ども達に親しまれている。しかし、歌詞を取り上げて検討した結果、今子ども達と一緒に楽しんでいる幼児歌曲は、今の子ども達に好まれる歌が多く取り入れてあることも間違いのない事実である。

このように多くの表現題材を含んでいる幼児歌曲をとおして、単に歌を楽しんでいる活動だけではなく、言葉の理解や獲得というその年齢に応じた言葉の発達においても配慮が必要とされる。(表5参照) クーイング→過渡期の喃語→規準喃語→指さし→幼児語→「コレナーニ?」→会話という子どもの言葉の発達を踏まえ、歌う活動が様々な保育の内容に発展していくことを考慮しながら指導案を考えたり子ども達との関わりの中での言葉がけや歌いかけが大切となってくる。

正高氏は子どもにとって言葉を獲得する上での歌いかけの大切さを次のように述べている。^(注6)赤ちゃんは歌を耳にすることによって、言葉というものを覚えはじめ、周囲と様々なコミュニケーションをとることの習得は、音楽を聞き分けることの学習から始まる。そして、言葉の習得過程においては、単に教わっているばかりの受け身的存在なのではなくて、もっと主体的に自分から働きかけていくなかで言葉を習得していく。単に耳で聞いた情報を、頭のなかで処理するにとどまらず、積極的に身体を用いて対象に関わるなかで自主的に言葉の意味を理解していく。

これらのことから、保育者は子ども達の言葉の獲得にも配慮をし、歌や楽器の音色をとおして思いを伝えたり、歌の持つ雰囲気をリズムカルに伝え楽しむことによって関わりを深めていきたいものである。幼い頃に受けたこのような経験によって子ども達は単に歌を理解するばかりではなく、言葉の意味を確かめつつお互いにコミュニケーションを図っていくのであろう。そして保育者や母親の歌いかけが将来保育者を目指す学生の音楽意識のように大きく影響を及ぼすものと思われる。

表 5

「子どもの言葉の発達」

初語のころまで	<ul style="list-style-type: none"> ○ 産声から始まる泣き声に次第に変化が見られる。 ○ 生後1ヵ月前後からクーイングが聞かれ、2ヵ月前後からなん喃語が現れる。 ○ 人の声と物音との識別は誕生後間もなくからできる。 ○ 6ヵ月ころまでには、特定の人とのコミュニケーションができ、人見知りの行動も現れる。 ○ 8ヵ月近くになると、親しい人の語りかけや慣れた場面での言葉に理解反応がみられる。
一語発話のころ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 8, 9ヵ月から1歳半ころまでの間に初語が現れる。 ○ 新しい音声や動作をさかんに模倣する。 ○ 人とのやりとりを楽しみ、動作による伝達が増える。 ○ 象徴機能の芽生えであるフリ表現が始まる。 ○ 指さし行動が始まる。
二語発話のころ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 1歳半から2歳の間に2語発話が始まる。 ○ 助詞の種類がふえる。 ○ 幼児語や幼児音が多い。
2歳前後	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「コレナーニ？」とさかんに質問し、語彙数が急増する。 ○ 品詞の種類も増え、2歳までには、ほとんどすべての品詞を使う。
3歳のころ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 想像遊びがたいへん活発になる。 ○ 日常の会話にはほとんど不自由しない。 ○ 発音面も安定し、声の大きさの調節ができる。 ○ 大人となら電話でやりとりする。子どもどうしのコミュニケーションも言葉でやろうとする。 ○ 言葉の使い方の間違いや自分勝手な新語もよくある。 ○ 自分の言葉で自分の行動を調整できる。
4歳から6歳のころ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 4歳近くになると、過去・現在・未来の一連の出来事を時間的に順序だてて話すことができる。 ○ 副詞や形容詞などを使って詳しい話をする。接続詞や接続助詞を使って、事象と事象との関係を表現する。 ○ 人の発話や語の意味的理解も進み、言葉を使った生活が定着する。 ○ 言葉だけに頼った伝達には限界がある。 ○ 4歳を過ぎると構音は上達し、6歳になるころには幼児音はほとんどなくなる ○ 文字に関心を示し、ひらがなの読み書きを始める。
6歳以降	<ul style="list-style-type: none"> ○ 言葉による思考が活発になる。 ○ 話合いができるようになる。 ○ 言葉による行動調節機能も発達する。 ○ 文字言語が生活の重要な部分を占めるようになる。

5 おわりに

子ども達の育ちにとっての音楽の役割は大きい。表現としての音楽だけではなく言葉の獲得やコミュニケーションの習得過程においても大きく影響される。保育現場でも朝のあいさつの歌に始まり、終わりの会にはお帰りの歌を毎日歌っている。季節にちなんだ歌・行事に関連した歌など多くの歌を子ども達は楽しんでいる。また、歌う活動だけではなく、それらの歌をより膨らませてリズム遊びをしたり楽器を取り入れて音色を楽しむことも日々の保育でなされている。そして、音楽活動だけではなく遊びの中、お話の中、パネルシアターや人形劇の中など様々な活動の中で音楽は取り入れられている。

このようなことを考えると、音楽活動の最初の取り組みとしてまず自分の体、すなわち保育者自身が表現することであろう。それは、歌うことであり、手や体で表現することである。取り上げる歌に自分の思いを託し歌いかける。同じ歌を歌うとしても、対象の子ども達によって歌い方は異なる。また、子ども達の活動によっても取り入れ方は異なり配慮が必要である。その場やその活動にあった音楽を取り入れることが言葉の獲得にも大きく左右されてくる。そのためには、多くの歌をすぐに歌えるようにしていく事が必要になってくる。自分のレパートリーを多く持つこと、自分の好き歌を多く持つことである。それによって一人ひとりの活動においても、または一斉の活動においてもすぐに対応することができ、子ども達と向かい合うことができる。その場その場の機会をとらえ、子ども達と一緒に活動を創り上げることが保育内容を広げ、併せて音楽活動も発展し、より総合的な活動となっていくであろう。

引用文献

- 注1 厚生省 保育所保育指針（平成11年版） 1999 第1章 1 保育の原理
 注2 正高信男著 子どもはことばをからだで覚える 中公新書 2001 p i
 注3 正高信男著 子どもはことばをからだで覚える 中公新書 2001 p 1
 注4 教師養成研究会 幼児の音楽リズム 学芸図書 1966 p136
 注5 仲野悦子編著 感性を育む音楽表現 みらい 2003 p55
 注6 岡田 明編 子どもと言葉 萌文書林 2001 p22

参考文献

- 文部省 幼稚園教育要領（平成10年版） 1998
 厚生省 保育所保育指針（平成11年版） 1999
 正高信男著 0歳児がことばを獲得するとき 中公新書 2003
 正高信男著 子どもはことばをからだで覚える 中公新書 2001
 岡田 明編 子どもと言葉 萌文書林 2001
 教師養成研究会 幼児の音楽リズム 学芸図書 1966
 松中久義・楠景二編 幼児保育の歌とリズム 音楽之友社 1991
 小林美実編 音楽リズム 東京書籍 1984
 小林美実編 こどものうた200 チャイルド本社 1999
 早川史郎他編 幼児の歌110 エー・ティー・エヌ 1993
 寺島尚彦編 楽しい歌の世界1,2,3 ドレミ楽譜出版社 1991

資料1

「学生の音楽経験」アンケート

今までの音楽経験および音楽意識

1 自己紹介

長所 1

2

3

短所 1

2

3

2 音学歴

①音楽に対して (興味がある 興味がない どちらともいえない)

②日ごろ音楽を聞きますか (よく聞く 時々聞く 聞かない)

③楽しむ音楽ジャンルは何ですか ()

④今まで体験した楽器はありますか ()

習った期間 ()

3 今まで音楽を体験して感想を聞かせてください。

4 教材「こどもの歌ベストテン」には幼児歌曲が84曲あります。何曲知っていますか。

曲数 ()

子どもの時に歌ったことがある曲名 ()

母親に歌ってもらったことがある曲名 ()

その他 ()

5 知っている曲のなかでどの曲が一番好きですか。好きな理由も書いて下さい。

曲名 ()

理由